

図書館フォーラムでの「図書館と自殺と精神障がい者」の関係を考察

1、地域生活している精神障がい者が図書館を利用していること。

・家にこもることが当人の精神状態によくないということを自覚しているので日中のスケジュールに外出先として利用している。

・公的な施設なので、いつでも誰でも利用が無料ということ。

(働きたい精神障がい者に対して、危険・怖いという偏見を持った企業が多いので働くところがなく経済的に厳しい)

・交通アクセスがよい。

2、自殺者の9割が精神疾患に罹患していた可能性があるということ。

・可能性があるということは、実際病院に行かなかったということで、病院に行って、なぜそのような状態になったかの原因を医師に話すことで適切な関係機関に繋げて問題を解決することをやっていけば、9割の方は死を選ばなくてよかったかもしれない。

・深く悩めば必然的に精神疾患の症状が現れてくる、周りに病気の理解がない。

・気軽に行ける精神科診療所や病院でないことが、関係機関へ繋げることが遅れる。

・問題を抱えている当事者は孤立して他者と繋がらない状況に陥っている。

・うつによる自殺者が6000人ほどいるという報告、仕事を辞めさせられる、夢や希望が持てない、悲観的になる。

・国は、自殺やうつ病による2009年度経済的損出は2.7兆円。

・323万人の疾患者がいるけど未受診、治療中断者を含むとまだ多い現状。

・4疾病から精神疾患を追加して5疾病になる。

・県は来年度(平成25年)から医療計画で精神疾患に対する普及啓発を促進していく。

・対処療法による対策でなく問題の核心を取り除く対策、ストレスを生む社会の在り方。

・生きていれば問題は起きるわけでその問題を解決するための人間関係があればよいが、現実には個人主義から孤立主義という時代になり「われ関せず」ということがコミュニティの崩壊に繋がっているの、どのようにコミュニティを再生してお互い共生するか、問題解決の道。

・宮崎に於いて300人ほどの自殺者が図書館に来て自殺するのを回避する公共施設としてどう答えられるか。

・プラットフォームとしての図書館の施設を活かしてもっと人と人を繋ぐ企画を民間と連携して実施してほしい。写真ワークショップなど。

・従来、公的な施設はマジョリティーのニーズに対応していたが、これからの時代はマイノリティーの課題にどう答えていくかが、マジョリティーにも答えることになる。

・成熟した社会とは、そのような社会ではないかと考えている。

・既成にとらわれなくて、チャレンジして失敗してもリベンジできることが支援され、「できない理由」でなくて「どうすればできるか」を考える人間が多くいることが、宮崎県が生き残る最大の要因と考えられる。